



柿生文化

平成22年8月20日
川崎市立柿生中学校
柿生郷土史料館 情報・研究誌
第26号

アーネストサトウの世界「印象川崎」^{幕末} ~明治 こよなく日本を愛したイギリス人外交官 自らを「佐藤 愛之助」と称す

イギリスの外交官アーネストサトウは、文久2年(1862年)9月に19才の若さで初めて日本の土を踏みました。それは、通算25年の日本勤務の始まりでした。



(アーネストサトウ)



(妻の紺糸)

当時の日本は、まさに混乱の時代でした。尊皇攘夷激化の中、坂下門外では老中の安藤信正が襲撃され、土佐藩の重臣吉田東洋が暗殺され、8月21日には有名な生麦事件が発生しました。やがて、薩英戦争(生麦事件後、イギリスと薩摩藩の対立から生まれた戦争)、下関戦争(長州藩の下関海峡の米・英・蘭・仏の砲撃に対する報復戦争で長州側の敗北に終わった)、自らも日本人攘夷派の襲撃を数回にわたって受けながらも勤務をこなし、そして徳川幕府の壊滅という激動のさなかの日本の第一歩であったのです。

彼は、やがて明治2年(1869年)にいったん帰国しましたが、翌年明治3年に再び日本に戻り、明治16年(1883年)まで英国公使館に勤務することになります。その在任期間中は、たいへん西郷隆盛に心酔しており薩摩藩に対してもある特別の思いがあったようで自分の姓「サトウ」を「薩道(さとう)」と号していたそうです。

彼は、日本の風土や習慣に対して大変興味をもっており日本女性を妻とし、さらに計35回、延べ日数にすると450日にもわたって非常に精力的に北海道から九州まで日本全国を旅行しています。明治14年(1881年)にその時の旅行日記をもとに全510頁の「明治日本旅行案内」が出版されることになり、やがてこの本は、海外から大変高い評価をもらいます。『本書は、日本の歴史、伝説、習慣、芸術に関する百科事典といえよう。今後は本書を持たずに日本の国内旅行に向かうことはないであろう。そんなことは、富士山に裸足で登山するようなものである』と称賛されています。



(サトウも宿泊したであろう二子の「亀屋」)

サトウは、川崎の「二子」について次のように述べています。『新町村と瀬田村を通り過ぎて多摩川の渓谷に降り立ち舟で川を渡り二子に至る。(旅宿一亀屋、良好)ここは、夏期になると川でとれる「鮎」釣りの見物人で賑わうところだ。日本人の間で流行しているこの娯楽は魚釣りとはほとんど呼べない』次頁に続く→



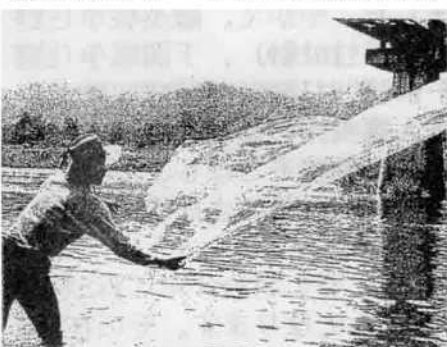
(日本のガイドブック)

アーネストサトウの見た多摩川の鮎漁

前より続く→とサトウは日本の鮎漁は魚釣ではないといっていますが幕末から明治にかけての鮎漁は、「鵜飼い」や「網漁」が中心であったといわれています。「鵜飼」といいますと長良川の鵜飼いが有名ですが、なんと多摩川でも行なわれていた漁法でした。

右の図は多摩川の鵜飼いによる漁法ですが、中央の「鵜使い」と両側の「勢子(せこ鮎を追い立てる人)」の3人一組で行なわれ、勢子が鮎を川の中央に追いたて、中央の鵜使いが追われてきた鮎を鵜に飲み込ませる方法です。下の写真は、投網(とあみ)による漁法です。サトウの見た漁もこのようなものであったと思われます。

サトウが多摩川に来たのは、明治の初期ですからその後、漁法もずいぶん変化したと思われます。明治40年に玉川電気鉄道が渋谷から二子玉川まで開通すると俄然東京からの行楽客がふえてきます。二子橋付近には12~3軒の川魚料亭が軒を並べ、屋形船も各川魚料亭が自分の客を乗せ、捕れた鮎はてんぷらや塩焼きにして食べさせたそうです。



(多摩川の鮎の投網漁)

それは、夜間川に錨(いかり)を下ろして餌を付けない釣り針をいくつかあらかじめ取り付けておいた釣り糸で川面(かわも)をたたくという方法だ。するとこの一撃によって二・三尾の魚が場合によってはヒレや頭部や尾等を針に引っ掛けて引き寄せられてしまうのである』と、やや不満そうに書いています。さて、どんな漁法だったのでしょうか？

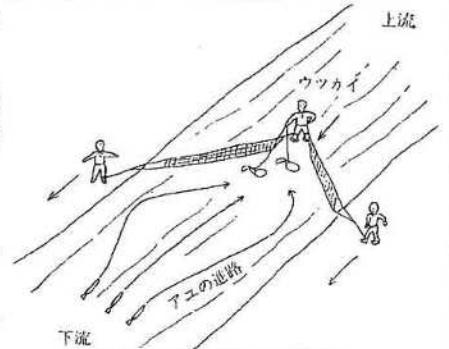
(参考史料:「明治日本旅行案内」庄田元男訳・「昭島市史」・「多摩川の鵜飼」(あゆたか39号)角田益信著)



(世田谷方面より眺望した菅村・中野島村・菅生村・登戸村二「江戸名所図会」)



(多摩川の鮎漁二「江戸名所図絵」)



(多摩川の鵜飼い二鵜による鮎漁法)



(島崎藤村の多摩川の鮎とり見物二手前右側が島崎)

— 柿生・岡上地名考 VIII — 万福寺

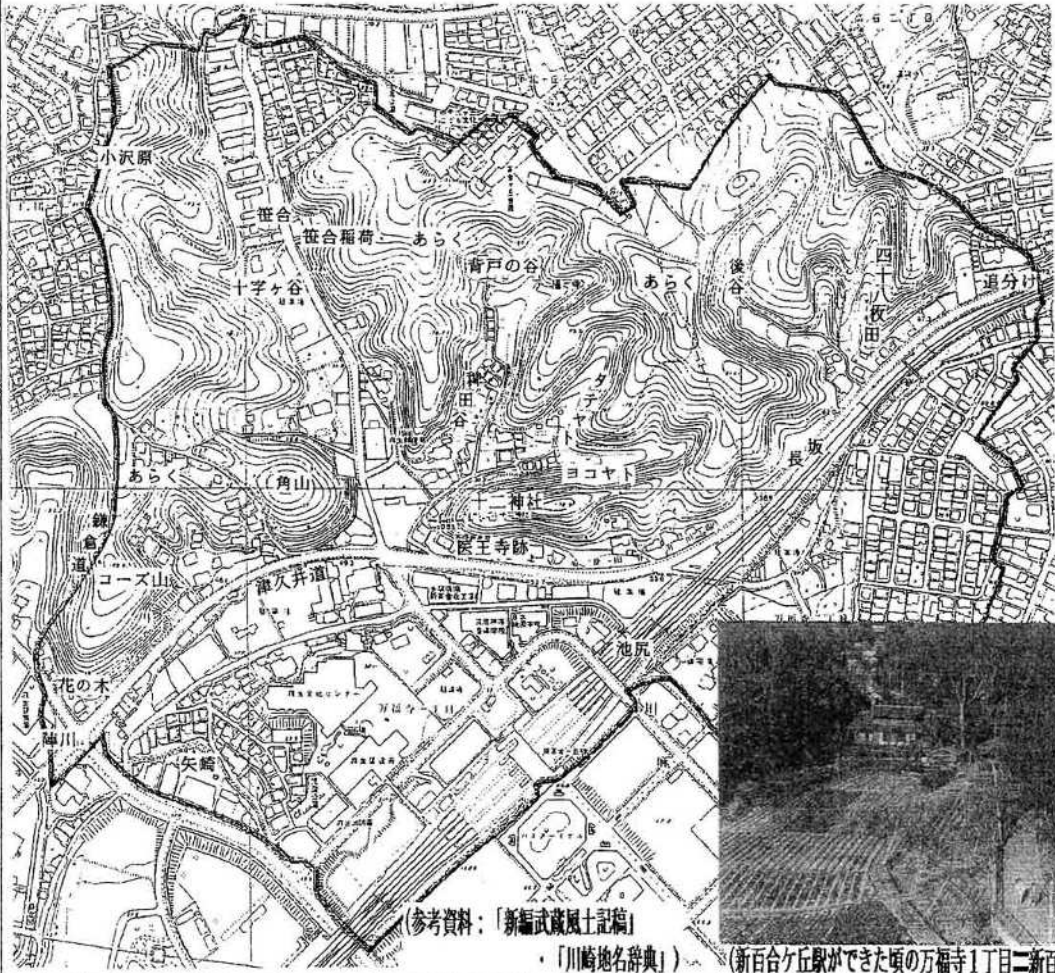
麻生区の
中心地 近代都市に生まれ変わった万福寺

麻生区万福寺は、昭和40年代より新都市計画にもとずき、かつての純農村地域から近代都市へと変わっていきました。

万福寺という地名は、昔、「万福寺」という寺があったことによる地名と考えられますが、江戸時代後期に編纂された「新編武蔵風土記稿」のなかには登場していないことからそれ以前と考えられます。戦国時代(16世紀)の「小田原衆所領役帳」には「小机万福寺」と記されていますのでこのころまでは「万福寺」も存在したのではないかと考えられます。それでは、この地域の古地名を考えてみましょう。

長坂は、津久井道が高石方面に向かって登る長い坂を言っています。池尻は万福寺1丁目新百合ヶ丘の新宿寄りの辺りで昔、池がありました。笹合(ささご)は麻生郵便局の辺りから千代が丘4丁目との境に至る地域で高石の法雲寺を開いたとされる「笹子姫」(後白河法皇の娘)の伝説が残っています。十字ヶ谷は笹合谷を横切るような形だったため追分(おゆわき)は、道の分岐点をさし旧津久井道と旧王禅寺道の分かれるところでした。小沢原(おさわら)は小沢原合戦(1530年)の古戦場と伝えられている尾根状の地域です。矢崎は小沢原合戦の時、弓矢が飛んできたという言い伝えがあります。陣川(じんがわ)も

先程の合戦と関係があるかも知れません。この地域にお住まいの中島家のご先祖の中島隼人がこの合戦に出陣したといわれています



(参考資料:「新編武蔵風土記稿」)

・(「川崎地名辞典」)

(新百合ヶ丘駅ができた頃の万福寺1丁目二新百合ヶ丘北口付近)

ぞくぞく集まる郷土史資料

柿 生
郷土史料館

現在、柿生史料館設立準備委員が直接各お宅にお邪魔して郷土史資料の寄贈・寄託のお願いをしておりますが、地域の皆様の温かいご配慮により、たくさんの方の史料を寄せていただいております。

現在のところ近世～明治の古文書、掛軸や縄文土器等の考古史料等、数多くの史料が寄せられています。皆様のご協力に感謝いたします。



(土蔵から運び込まれた古文書類)

カルチャーセミナー案内

第23回 柿中 **カルチャーセミナー** 案内

テーマ 「古代の杉山神社」

日 時 平成22年8月30日(月)
18:00～

会 場 柿生中学校「郷土史料館」

講 師 平野 卓治 氏
横浜市歴史博物館主任学芸員

新聞情報

7月17日神奈川・読売新聞
古墳時代の銀装大太刀出土 秦野市
— 6世紀後半県内初の完形太刀 —

秦野市大槻の二子古墳の横穴式石室内の下から6世紀後半とみられる長さ58cmの銀装の鉄製太刀が全形を残した状態で発見されました。

この古墳は、前方後円墳で平成20年度より発掘調査が行なわれており6世紀代の土器の破片とともに、人間が埋葬されていたことを示す耳環(じかん二耳飾)や鉄製矢じりなども発掘されました。

郷土史料館「史料」の寄贈・寄託のお願い

このような史料はありませんか

- ◎古代の「縄文土器・弥生土器」「石器」「土師器」「須恵器」
- ◎江戸時代の「検地帳」・「水帳」・「五人組帳」・地域の「絵図」
- ◎江戸時代の「高札」(慶応4年の太政官布告「五榜の掲示」など)
- ◎江戸時代の寺子屋や私塾で使用した教科書・手本「各種往来物」
- ◎江戸時代の「藩札」「通行手形」
- ◎明治期発行の「地券」 ◎明治期の「自由民権運動」史料
- ◎明治・大正・昭和(戦前・戦中)の「国定教科書」・「新聞」
- ◎小型の農具「千歯こき」「備中鍬」「からさお」
- ◎各時代の「古銭」「生活古民具」(矢立て・印籠・火打ち・鏡・装束など)
- ◎その他各種史料「各種古文書類」「美術品」

寄贈・寄託していただける史料がありましたらご一報ください。
柿生中学校 044-988-0004 黒川まで